
Zaoralu Meit

Neutral escape

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Z a o r a l u M e i t

【Nコード】

N 0 8 8 6 P

【作者名】

N e u t r a l e s c a p e

【あらすじ】

未来のこの世界には、環境問題は存在しない。それは、ある科学者の発表が起こしたものだった。

ブログ

—— 努力はいつかむくわれる。

そういったのは誰だっただろう。

・・・私は絶対に・・・絶対に信じない。

時は20××年。7月13日木曜日。
14時29分33秒。

この時代には、もう既に環境問題について心配する人はいない。
なぜなら、その問題は解決済みだからだ。

『地球温暖化の原因はCO2ではない。』

そう発表した科学者がいた。

しかしその科学者は「遺伝学の父」と呼ばれたメンデルや、
地動説を唱えた誰かと同じように科学界から追放された。

しかし、人類は昔とあまり変わっていないかった。成長していなかった。
た。

その科学者が死んだ後に、その説が有力化されたのだ。

そのため国は、自らの過ちを隠すために、表向きではCO2削減に
取り組み、

裏では本当の原因を解決するために、全力で環境問題に取り組んで
いた。

そして温暖化の原因をつきとめたにもかかわらず、科学界から永久
追放されていた科学者が亡くなって10年後、

地球温暖化はストップした。

それを引き金に、ほかの環境問題も次々と解決法が発表され、全ての環境問題が解決した。

そして世界は発展した。

温暖化の原因はCO₂ではないと発表した科学者のことなんて世界の人々は忘れてしまっていた。

その科学者には娘がいた。

その娘は――

プロローグ（後書き）

ありがとうございました。

－ １ － に つ づ く

File 1 (前書き)

遅くなりましたが続きです。
ごめっくりどうぞ。

File 1

見上げたら青い空。白い雲。
直径30m天窓があるドーム型の建物の中に、私は入ろうとしていた。

外から見ただけでも大きい天窓は見えるのだが、それでも半分見えるか見えないか、という位のもの。

あるパンフレットでこの建物の存在を知り、天窓の大きさもそれで覚えた。

つまり。驚きの大きさなのだ。

スウ——息を吸って入り口のスイッチをお・・・

「ちょっと君、ここの生徒？」

「うわっ。あ・・・い・・・いえ！」

突然の声に私は驚きを隠せなかった。

「え？違うのかい？」

「はい。まだここには入ってなくて・・・これからです。」

「そうなのか。じゃあ、またこようかなあ」

ほかの人に聞かないのかな・・・そう言う前に、男の人は去って言った。

それはともかくもう一度。スイッチを押すために手を

「ねえ！君って例の転校生？」

「え。ああえつと、多分そうですけど・・・」
なぜことごとく声をかけられるかは分からない。
その女の子達2人はさらに続けた。

「私、ニーナって言うんだ。」

成る程。ニーナは茶髪で髪を二つに結んでいる。
身長は私より少し高めだから、165cm程度だろう。

「あつ。ニーナずるい！私はね、ネロって言うんだよ」
ネロは黒髪でストレート。身長は私と同じくらいだろうか。
私が名乗るよりも早く、2人は去って行った。
招き入れてくれるわけではないらしい。

カチ・・・一思いにスイッチを押してしまった。
ウィィィイン と機会音が響き、目の前にあった大きな扉が開く。
私は開いている扉の先に足を踏み入れた。

『フィロ・レイさんですね？』
「は・・・はい。」

入ってすぐのその部屋は個室だった。
上から降ってきたアナウンスのような音声に戸惑い、スピーカーを探
す。

『身分証明書を出してください。』
私はその音声の指示に従い、たくさんの荷物の中から、過去に使っ
ていた生徒手帳を取り出し、おそろおそろ広げて見せた。

『はい、OKです。では、入校するにあたり、個人調査票を作成し
ますので、幾つかの質問に答えてください。長くなることが予想さ

れますので、荷物を棚に入れ、椅子に座ってください。□

カメラまであるのかここは。

見渡してもそれらしいものは見当たらない。

仕方なく言つとおりにし、座った。

いよいよ、はじまるのだ。

File 1 (後書き)

ありがとうございました。

・・・続く

File 2

はじめに、説明をしておかなくてはならないと思う。

どういう経緯で、もしくはどういいういきさつでここまで来たか。

もう分かってる人、めんどくさいと思う人は聞かなくても文句は言わない。

あとで分からなくなっても二度と説明はしないだろうけど。

私はフィロ・レイー（ちなみに本名ではない）

出身地はルネス国14番地の南。

今、いるのはルネス国の隣のフッシャーという国だ。

この世界は全部で100あまりの国で成り立っている。

その中のハウン大陸という大陸の中には、全部で7つの国が入っている。

ルネス、フッシャー、ウイング、レナト、ファイナ、ミリル、サユ

と言うが、覚えなくても問題はない。

そして、ハウン大陸の国の中には全部で200の番地がある。

これは7つの国の会議で決められた事だ。つまり、200×7国分の番地があるということだ。

私は元々、ルネス国の小さな中学を卒業し、高校もルネス国に行っていた。

そのまま卒業するつもりだったが、都合によりルネス国の隣の国、フッシャー国に引っ越した。

父と母はすでに他界していたので、元々フッシャー国に住んでいた、伯父、伯母、いとこの家に泊まって過ごしていた。

すると、伯母があるとき、どこからかパンフレットを引っ張り出してきた。

ルネスの高校を卒業するつもりだった私は、フッシャーに来てからやる気はもうほとんどなく、

フッシャーの高校に途中から行く気もなかった。

フッシャー国は、ハウン大陸の中で1番のファイナに次ぐ、経済大国のため、ルネスよりも大きくていい学校もあるだろう。

” 何もしないよりは、行くだけ行け ” と言われた私は、パンフレットに目を通して、驚いた。

何なんだこの法外な大きさは、と。

そして校内の機械の発展も半端ではない。

転入の試験は、受けてみると余裕で合格であった。

あとで見ると、学力はあまり重視していない とカリキュラムに記してあった。

中央ホールに直径30メートルの天窓がついていたり、テラスがあったり。

ルネス国では考えられないくらいのお金の賭け方であった。

そして、全寮制。

寮は設備が整ってて、とても清潔できれいらしい。

制服、勉強、施設、そして出世率。どの点においてもドストライクである。

こうしてみればいいところばかりなのだが、私は今日まで、この学校に転入することを拒んでいた。

それは、” 条件 ” というものが存在していたからである。

File 2 (後書き)

ありがとうございました。File 3 につづく

File 3

その条件とは。

参考のために、一部例を挙げておこう。

校則第43条 本校は、ポイント制となっており、ポイントによってその人の地位が変わる。

その際、下の地位の者は上の地位の者に逆らう事は例外を除き、許されない。

校則第76条 本校において、1ヶ月を通して成績が最下位だった者は他の生徒によって殺される。

その際の死体などは、本校が責任を持って処分するが、死因は『事故死』とされ、報告される。

校則第82条 剣術を使って、正式な場で人を殺した場合、その者は3ポイント獲得できるものとする。

校則第55条 本校では、魔術の勉強を行うが、他人との争いの最中にそれを使い、他方が死に至っても、本校は責任を負わないものとする。

校則第108条 第105条のように、本校は全寮生であるが、寮内で争ったものはある場所へ行く事とする。

校則第248条 退学はできない。

ざっと挙げただけでも結構残酷な感じである。
校則の108条のある場所 というのは、どこだかわからないが、

とりあえず罰を受ける事になっているのだろう。

・・・ポイントの増加方法の基準とかもよく分らないが追々分かっていくのだろう。

しかし、あの大きな天窓の下では血しぶきが・・・と思うと前へ進めないのである。

元々学校の設備がしっかりしてるし、お金がかかるのはクラブ活動と寮費のみ。

こんなにすばらしいところを寄せ集めた感じなのになんなんだこの条件たちは。

説明会で私は絶句した。

他にも校則はあり、全部で1000以上あった。

説明会のときに、教員が『退学はできません』ってことを強調してしめくくったのがすごくひっかかる。

説明会に行ったのは、家族の中で私のみなので、伯父、伯母はこの学校のいいところしか知らない。

つまり、私がこの学校で死んだとしても、学校内の教員や生徒以外の人、即ち世間一般からしたら単なる『事故死』になるし、遺体も残らない。

そんな思い事実を一人でかかえ、一人でここにやってきた。

ルネスの高校を1年間過ごした後、ここに来たわけだから、新しい学校の2年生である。

まあ、実際の年齢は一つ上だが、そんなことは気にしない。

『あと、1、2年の我慢じゃないか。』

そう思った皆様。甘い。

この学校は6年制である。

File 3 (後書き)

ありがとうございました。

File 4 につづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0886p/>

Zaoralu Meit

2011年10月7日16時02分発行